

共同研究の構想と概要^①——導入のために

研究代表者 稲賀 繁美

研究目的

一九世紀後半以降、とりわけ、第一次世界大戦を経験した西洋世界には、自らの行き詰まりを克服するための可能性を「東洋」に求める一群の思索が登場する。一方、同時代には「東洋」の側から自らの「非西洋」的な異質性を自覚し、西洋を凌駕する「東洋」観を確立しようとする学術／藝術も現れる。本研究は、この両者の交差した地点に浮上した「東洋」像に注目する。思想と造形とをめぐる具体的な論争や衝突を吟味しつつ、国際的同一化への要請と文化的異質性への容認との不確定な許容範囲に聞きあう、葛藤と妥協とを司る機構を解明することが目的となる。

研究の学術的背景

エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』（一九七八）は、「東洋」とは西洋世界が自らの利害関心に沿って捏造した虚像であるとして、その政治性を糾弾した^②。中近東アラブ圏を主要な対象とするサイードの著作

はその後三十年近く、学術における西洋中心主義を脱却するうえで、北米を中心に大きな影響力を發揮した。だが現時点では、サイードの提唱したオリエンタリズム批判そのものが、北米人文術界左派の支配的理念となり、それ自身が西欧アカデリズムに組み込まれ、あらたな学術的基準として世界を席捲する状況を生んでいる。ここには、非西洋世界を西洋世界による抑圧の被害者として規定し、その怨恨を煽ることで、少数派に「他者性」ゆえの優位を保証する反面、かえって東西あるいは西欧と非西欧の対立を図式的に固定化する副作用が亢進している。

研究代表者のこれまでの研究成果と経緯⁽³⁾

研究代表者は『岩波イスラーム事典』に「エドワード・W・サイード」の項目執筆を依頼され、また『イスラームを学ぶ人たち』への依頼寄稿にあっても『オリエンタリズム』の構想に含まれる問題点への批判に先鞭をつけた⁽⁴⁾。またウンベルト・エーコを中心とする欧州共同体・国際学術組織 Transculturā (一九八八年発足) の創設会員として、思想的な側面並びに造形藝術分野においても、西欧世界とアジア・アフリカを含む非西欧世界との価値観相克の克服をめざす多くの国際会議で、微力ながら提言を続けてきた⁽⁵⁾。一九九八年には国際日本文化研究センターにおいて *Crossing Cultural Borders, Beyond Reciprocal Anthropology* を開催し、その報告書でも、価値観の対峙を土俵に乗せることで、かえって対立を煽り立てるがごとき、学術論争の偽りの対話原理の政治性に疑問を呈してきた⁽⁶⁾。これらの提言は国連大学 United Nations University が二〇〇一年夏に東京で組織した国際会議ほかにおいて、活発な議論を招いた⁽⁷⁾。だが、直後の九月一日の事件以降、「文明間の対話」という話題設定そのものが、急速に退潮していった。

他方、造形藝術に関する分野でも、研究代表者は、学術の土俵のうえで「東洋」という概念規定の恣意性が隠蔽され、価値中立な学術規範へと変装されてまかり通っている現実を、一貫して批判してきた。その発端は一九

九六年にパリのボンビドー・センターで開催された『日本の前衛』展へ理論的批判にあり、近年は二〇〇八年ロンドンの大英博物館「日本の伝統工藝」展をめぐる公開討論会への招聘に至る⁹⁾。そこでの論点を整理しよう。端的にいつて、博物館、美術館のような行政組織、美術史・美学・藝術学を含む東洋学という学術上の枠組みの設定、さらにはそれらの学問分野における対象領域の限定という二つの次元に渡って、西欧社会で成立した制度的・理論的な枠組みによって世界が分別され、考察の対象へと整序されている。だが、多くの「文明間の対話」や「国際学術交流」は、自らがこうした歴史的・政治的な足枷に囚われていることに無自覚のまま、かえってその反復的再生産と共犯的な補強に努めている。

また「文明間対話」の実態も、利害関係者が各自の陣営に立脚した自己主張を繰り返す雄弁術の国際対抗競技大会に過ぎず、対話とは無縁な外交儀礼に終わる場合が少なくない。招聘講演者やその後援母体には、政府機関、非政府機関を問わず、出身国や国際社会での自らの社会的地位の保全や、利己的な自己栄達・自己満足のために、こうした「国際対話」への出演の機会を窺うような有名文化人の例が後を絶たない。国際的な檜舞台の興行主や公共メディアの側でも、興行成績で点数を稼ぐための格好の定番として「異文化対話」という土俵を利用する傾向が否めない。外国からの来賓を招いて講演を開けば、それで「国際化」が首尾よく達成される、といった安易な思い込みは、近年の大学院重点化やCOE拠点形成事業の掛け声とともに「打ち上げ花火」が要請されるにつれ、かえって助長されているのではないか、という危惧も容易には拭い去れない。

だが国際競技大会の学者版、あるいは文化人の国際見本市は、本来の文明間対話とは無縁だろう。問題は、オリンピックのように、西欧近代が設定した競技規則を無条件に受け入れ、競技に参画することが、そのまま国際化として是認される、という短絡にある。対話が競技に類比できるならば、それは勝敗の別を容認することに繋がる。敗者は発言権を失うとなれば、逆に敗者・弱者を詐称し、その擁護を訴えることで強者の地位を篡奪しよ

うとする欺瞞が登場する。これが冒頭に触れたサイードの画期的著作の驥尾に付して、寄生虫よろしく繁殖したサイディズム *Saidism* と呼ばれる風潮に他ならない。

さらに国際化は即ち善とする思い込みが日本には現在もなお支配的だが、その国際社会を律する掟は、時の支配的体制たる覇権が準備したものに他ならない¹⁰⁾。国際化とはけっして無味無臭の中立性ではなく、それどころか現実政治の権力闘争の現場である、という認識が欠落している。だがそのことは、覇権争いに勝利を収めなければ国際的な自己主張は不可能である、との認識には結びつくまい。もとより国際的という価値観は、国という単位を前提とした複合体に焦点を合わせて設計されている。だがはたして国という単位が文化間対話にとつて最適かつ唯一の基準かといえば、そのような自明性を享受できる国民は、それこそ今日の国民¹¹⁾ 国家体制にあつて少数派でしかないことが、すぐにも判明する¹²⁾。このような思い込みは、自国の領土以外ではほとんど自国語が用いられず、しかも自国領土内部では単一の言語によって生活や教育全般が律せられ、それに自足できる（という虚妄が支配的である）という条件を満たすような稀な国家（その一例が日本だろう）にしか通用すまい¹³⁾。

だがひとたび大相撲やプロ・サッカーの世界を見れば、日本においてさえ、特権的な技能者を中心として、移民国家や複数民族国家、複数言語国家状況が急速に進行していることが見て取れる。二〇一〇年の統計によれば、今日の日本人の二五人に一人以上（四・三％）が「国際結婚」する、との報告がマスコミをにぎわしているが、この「国際結婚」なる名称が今なお社会的に通用することにこそ、日本社会の特異性、意識のうえでの顕著な閉鎖性が認められる。領土問題としての国境（*inter-cultural*）の比喩は足元から揺らぎ、異文化間対話は近所付き合いや家庭内の争議（*intra-cultural*）へと変質を遂げている。そのなかで「東洋意識」を問いなおすことには、いかなる意義があるのだろうか。

研究計画と制度的・財政的基盤

この問いへの間接的な応答として、昨今の学術事業遂行に伴う社会的要請に従って、やや煩瑣ながら本研究に先立つ経緯、および本研究計画を支える制度的・財政的基盤について、簡略に説明する。研究代表者は、奉職する国際日本文化研究センターにおいて平成一七年よりの三年計画として、共同研究会「日本の伝統工芸再考」(二〇〇三―二〇〇六)の組織を許された⁽¹³⁾。その一環としての国際研究集会を含む機会を活用し、従来の西洋側の定義による「美術」研究や「伝統」観に内在する偏向に対する批判的認識を国際的に覚醒させることに、意を用いてきた。「工芸」は従来、欧米定義の「美術」からは排斥されてきたからである。こうした問題意識は James Elkins (ed.) *Is Art History Global?* (Routledge, 2007) ほかで展開する機会に恵まれ、それなりの反響を呼び、英語圏・フランス語圏に跨る複数の講演を依頼されてきた⁽¹⁴⁾。

だがその一方で、徒に欧米との違いを誇張して「アジア」あるいは「東洋」の自己主張を強めようとする居直りのような反動傾向も見逃せない。研究代表者は、国際比較文学会の国際理事として、幾つかの国際学会での学術発表を通じ、そうした「被抑圧者」やその「庇護者」を演じる身振りの独善性や危険性を繰り返し指摘してきた。そのうえで、東西の是々非々に囚われる限界の彼方で、異なる価値観が衝突する局面、文化接触がその臨界で呈する現象を解明しようとする「文化間葛藤の気象学」Climatology of Cultural Conflict を提唱している⁽¹⁵⁾。

本書の母体となった共同研究は、こうした経歴を下敷きとして、その次の段階を目指すものであった。幸いにして問題意識を共有する内外の研究者に、専門分野を横断しての参加とご協力を仰ぐことが叶い、平成二十年より三年計画で、国際日本文化研究センターにおいて、ふたつめの共同研究会「『東洋美学・東洋的思惟』を問う…自己認識の危機と将来への課題」(二〇〇八―二〇一〇)を主催することが認可された。ただし大学共同利用研究所の共同研究会では、規定によって、研究会の参加旅費(原則として国内、例外として国外よりの限定招聘)が

支給されるのみである。研究遂行に必要とされる現地調査・体系的な文献蒐集と分析とに要する研究費・設備備品費は提供されていない。また、日本における国際研究集会の実施、海外における現地研究者を交えた研究会組織のための費用も、科学研究費補助金による助成を必要とする。このため平成二二年度より三年計画の「基礎研究（A）（一般）」に「『東洋』的価値観の許容限界・「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」という研究課題を申請した。幸いにもこの計画調書も審査を通過し、了承されるに至った。

以上のような経緯を踏まえた本研究成果報告書は、国際日本文化研究センターの「共同研究」の成果報告の一斑をなす。一方、そこに寄稿された個別研究は、右に記した科学研究費補助金による調査・研究の成果を盛ったものであることを、ここに確認する。

研究計画

こうして発足し、研究資金の裏づけを得た研究会であるが、具体的には、以下の六件の互いに密接に関連する課題を設定し、分科会形式の調査研究により解明するものとした。

- I 西洋の衝撃に対して「東洋」から発言した知識人・藝術家の思想・行動分析…
従来の国別の分析を乗り越え、東亜・東南亜・インド・イスラームを横断する。
- II 「東洋からの教訓」を汲んだ西洋の知識人・藝術家の思想と行動の歴史・類型分類…
第一次大戦、第二次大戦などの時代状況との関数において主要な論争を位置づける。
- III 美術史、考古学、哲学、思想史などの学術分野における「東洋」の位置づけ…
東洋学の編成過程を西洋のみならず、東洋各地の学術制度の整備において把握する。
- IV 万国博覧会、国際展覧会などにおける「東洋」規定をめぐる混乱と論争の総括…

従来の一九世紀中心の研究を越え、二〇世紀前半の植民地博覧会を視野に収める。

V 近代制度確立における「東西対立」と思想・造形における価値観の相克の分析…

美学、哲学だけではなく、経済思想、政治思想、法思想における知見と比較する。

VI 「東洋対西洋」の対比図式に孕まれたジェンダー的偏差の比較文化・方法論的検討…

帝国主義体制における支配側女性・被支配側女性の立場の相克の実相に輪郭を与える。

科学研究費補助金の申請では「当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点および予想される結果と意義」の記述を求められる。該当箇所を以下に簡略に述べる。

まず、本研究の学術的な特色は、一九世紀後半以降の「東洋」を、西側世界の利害関心と、「東洋」側の自己認識との衝突、葛藤の狭間に形成された「制度および実質」と見なす立場にある。

「東洋」とは、西欧と非西欧世界の価値観が衝突する臨界が描く「表象」のひとつであり、そこで発生した混沌と妥協とが描いた「姿」である。いかなる「東洋」的価値観は歓迎され、許容され、いかなる臨界を越えた「東洋」の異質性は拒絶されたのか。従来未検討のままだったこの機構（力学的・化学的メカニズム）を、思想史や倫理学、美学・美術史を跨いで総合的、領域横断的に、国際的な利害対立を双方向より視野に納めて解明しようとする構想に、本研究の獨創性が存する。

ここから「予想される結果あるいは成果」は、以下の三点に要約される。

(一) 西洋世界の「他者」たる「東洋」の許容臨界を、具体的な論争や対立を手がかりに測定することは、「国際社会」の暗黙・無自覚な「掟」を批判的に炙り出すことに繋がる。支配的論理への追従でもなく、唯我独尊の傲慢でもない、第三の立脚点を理論的に提案してゆくことが、本研究の延長上で、将来にむけた実践的な課

題のひとつとなる。

(二) 許容と拒絶の狭間に析出する「東洋」の葛藤の軌跡を思想史・造形史を通じて多角的に精査し、その達成と挫折とを総合的に吟味することにより、国際的文化交渉の場で西洋的価値観と非西洋的価値観との対立を克服する、方法的な処方箋を見出す糸口を得たい。

(三) グローバル化が謳われる二一世紀社会において、従来の西洋基準の学術的方法や理論を非西洋社会の現象に一方的に適用する横暴への反省が求められている。西欧的価値観の擁護か、それへの敵対かの二律背反と膠着を越え、国際的な知的交流の場の再設定が不可欠である。そのためには、異質性への寛容と同質性への要請との乖離をいかに調停すべきかを問う必要がある。その実践的な英知を集約する教訓が、二〇世紀の「東洋」像の屈曲のうち未開発のまま秘められている。かかる知的遺産を発掘し、その教訓を再生するような成果の公表に結び付けたい。

本研究及び本書の具体的な構成

本研究は、右の「研究目的」にあげた六項目の課題にそって、科学研究費補助金の「研究分担者」に「総括責任者」を依頼し、そこに各分野から選出した適切な「研究協力者」を配し、分科会形式でのおのの課題に答えようとするものである。各々の課題で必要とする文献蒐集には海外調査を含むものとし、分析の成果をもちより、討議のうえ学術的成果へと精錬し、ここに本論文集として刊行する。その傍ら、研究の中間的成果を、関連する国際学会で発表・発信するための機会を提供する。ここでは海外での出版に耐えうる水準の成果報告を提供することを目標とする。本報告書は国内向けの出版であるが、これと並行して、国際日本文化研究センター主宰の第三八回国際研究集会の英文による報告書も編纂・刊行する¹⁶⁾。さらに科学研究費補助金から印刷費用を得て、関連

学会でのワークショップおよびセミナーの報告論文から、学術審査を通過した論稿を編纂のうえ、出版する¹⁷。これは、人文領域での国際的な学術出版状況が構造的な不況に見舞われているなかで、日本から必要最低限な海外発信を試みる企てでもある。

研究体制・研究組織と役割分担・分科会および本書の構成

本書の構成は、おおむね右に述べたⅠ―Ⅵの問題意識に沿う分科会の組織に対応する。その各々に若干の説明を加えたい。なお各項の最後にある「研究協力者」とは、当該科学研究費による研究の「研究協力者」を意味する。これらの「研究協力者」は国際日本文化研究センターにおける共同研究会のメンバーとして研究発表を行っており、すでに学術実績において確たる評価を得ている研究者であることを付記しておきたい。また「招聘予定者」は、計画段階で、国際研究集会への招聘を予定した海外の研究者である。実際の国際研究集会は、上述のように、その後平成二二年に国際日本文化研究センターで実現した。科学研究費補助金申請時点での研究班の構想と内容は以下のとおりである（なお以下の「研究協力者」予定者には、異動その他の事情でご参加いただけなかった方も含まれる）。

Ⅰ 西洋の衝撃に対して「東洋」から発言した知識人・芸術家の思想・行動分析

統括責任・林洋子・李建志 《西欧の衝撃への「東洋」の反応》の第一世代として、辜鴻銘、孫文、岡倉寛三、ロビンドロナート・タゴールなど、欧文で著作を刊行した知識人の行動と思想を総合的に再検討する。同時に「東洋人」としての自覚をもって西洋世界で活躍した藝術家たちの軌跡とその時代的な蹉跌も掘り起こし、「東洋」の知的地政学のなかにあらためて位置づけ、従来の評価を刷新する。たしかに従来も、個々の人物に関する

独立した研究はなされてきた。だが、「東洋」の西欧への反応という視点から、中韓日さらにインド、ヴェトナム、タイ、モンゴル等に及ぶ、国籍を越えた比較考量を意図する枠組みは提案されていない。また個人々の思想研究は存在したが、その著作が具体的にどのような反応を引き起こしたか、美術行政を含む物質文化・精神文化への寄与と功罪、母語圏と記述言語圏での受容の落差、といった観点はなお未開拓であり、共同事業による情報集約・比較によって、可能なかぎりその全容を明らかにしたい。

◎ 研究協力者…平川祐弘、木下長宏、劉岸偉、劉香織、範麗雅、大嶋仁、ミッシェル・ダリシエ

◎ 招聘予定者…ミケール・マラー、太田雄三、ロストム・バルーチヤ

* 第一班の成果は、本書では第一部「東洋」イメージの変遷と葛藤¹⁷⁾ および第二部「東洋人の自意識」さらには文体上の配慮から「エピローグ」ほかに分けて収録する。

Ⅱ 「東洋からの教訓」を汲んだ西洋の知識人・芸術家の思想と行動の歴史・類型分類

統括責任…稲賀繁美・橋本順光 《東洋からの教訓》を汲んだ西欧側知識人の思想と行動を、領域・国籍を横断して解明したい。具体的には、東洋の倫理を説いたラフカディオ・ハーンらを嚆矢として、第一次大戦後に「西洋の危機」を訴えたポール・ヴァレリー、東洋美術史を世界美術史に組み込もうとしたアンリ・フォション、インドへと開眼したヘルマン・ヘッセ、東洋への旅から教訓を汲んだルドルフ・パンヴィッツ、キリスト教徒として仏教を攻撃したアルベルト・シュヴァイツァー、さらに東洋の脅威を訴えて、アジアに理解を示す西洋知識人たちを糾弾したアンリ・マシスにいたるまでの振幅を検討し、「東洋」の誘惑と脅威という、相反する反応の背景と発現の機構を解明する。フェノロサ、アンダーソン、ワグネル、ベルツらのお雇い外国人からはじまり、戦中期のカール・レーヴィット、ブルーノ・タウト、オイゲン・ヘリゲル、デイトリッヒ・ゼツケルなどに至

る「東洋」で教鞭をとった知識人の東西観と、通訳となった学生たちとの情報交換における偏差も無視できない。とりわけイスラーム圏を含む「東洋」の評価をめぐる論争を整理し、政治学的決定を背後から支えた国際的思想状況を総括したい。

◎研究協力者…芳賀徹、大橋良介、プラダ・ヴィセンテ、鵜飼敦子、檜垣樹理、山田奨治、マルクス・リュッタマン

◎招聘予定者…マンフレッド・シユパイデル、リチャード・ジャツフエ、ミンナ・トーマ、キム・ブランド

*第二班の成果は、本書には直接は収録せず、別途刊行の英語論文集（注16）ほかに収録した。⁽¹⁸⁾

Ⅲ 美術史、考古学、哲学、思想史などの学術分野における「東洋」の位置づけ

統括責任…藤原貞朗・戦暁梅 美術史学、考古学、哲学、倫理学など「東洋」をめぐる学術の制度的確立と、そこに発生した価値観の相克、欧米研究者と東洋の研究者との交渉の軌跡を、国際比較と具体的な人物交流を視野におさめて把握する。とりわけ従来、日本、中国、韓国を横断する学術制度設計の比較、相互影響と競合の様子には、充分な復元がなされてこなかった。また中国の金石学と西欧の考古学との接続・乖離、そこに孕まれた価値観の衝突なども、個々の学問分野内部では、たんなる新旧交代として片付けられる場合が多かった。西洋留学から箔をつけて故郷に凱旋した学者が、留学先では一介の情報提供者として遇された場合もある。瀧精一、大村西崖、濱田耕作、梅原末治、矢代幸雄から島田修二郎ら、海外にも影響力を及ぼした日本人学者だけでなく、中国で五四運動に関わった陳師曾、鄭昶、潘天寿、傅抱石、中国藝術史学会（一九三七）の発足に尽力した滕固、朝鮮の高裕燮、朴鐘鴻らを含む「東洋学」の系譜とその特色並びに限界を、国際的な知的力学の函数において解明することが目標となる。

◎研究協力者…礪波護、小田部胤久、西原大輔、西楨偉、衣笠正晃、オリヴィエ・クリシャール、古田島洋介、劉建輝、磯前順一、ミュリエル・ラディック

◎招聘予定者…巖安生、関周植、ペイ・ヒュンイル、リディア・リユー、アリス・フォルカー、ジャゾン・クオ、ペッカ・コルホネン、クリスチーナ・グライナー、バート・ウインター・タマキ、アントン・セヴィツラ

*第三班の成果は、本書では第三部「東西融合の夢と現実」にその一部を収録する。また幾つかの英文での報告は、別途刊行の英文による国際研究集会報告書(注16)に収録した。⁽²⁰⁾

IV 万国博覧会、国際展覧会などにおける「東洋」規定をめぐる混乱と論争の総括

統括責任…佐野真由子・パトリシア・フィスター 文化事業において露呈した「東洋」像の認識錯誤や混乱を抽出し、そこに発生した力学的・化学的変性作用を説明する。一九世紀後半の万国博覧会を始めとし、一九一〇年の日英博覧会、一九三〇年代のローマやベルリンの東洋展覧会、一九三六―七年のロンドンとニューヨークにおける中国故宫美術展などでは、展示品の価値評価、仏像を美術品と見なすか否かの価値基準等において、様々な葛藤や衝突が発生した。敗戦後の講和条約締結記念の展覧会の展示戦略に関しても、日中韓の状況比較すら学術的には手付かずのままである。また戦時中の満洲国や東南アジアの日本文化会館の運営、国際文化振興会の「文化工作」から敗戦後の国際交流基金の運営方針に至るまで、学術的な総括が求められている。

◎研究協力者…島本流、安松みゆき、伊藤奈保子、松原知生、今井祐子、河田明久、吉本弥生、千葉慶、鈴木禎宏、平野共余子、細川周平、李偉

◎招聘予定者…ジェニファー・ワイゼンフェルド、アイダ・ユエン・ウォン、菊池裕子、王正華、金淑榮、富井玲子

*第四班の成果は、本書第四部「演出される「東洋」…外延と内包」に収録したほか、英文による国際研究会報告書（注16）および、英文による海外・国際学会報告書（注17）ほかに分載する。²¹⁾

V 近代制度確立における「東西対立」と思想・造形における価値観の相克の分析

統括責任・瀧井一博・テレングト・アイトル 近代国家の制度的確立過程で発生した価値観の「東西対立」も看過できない。西洋学術と儒教的伝統との得失は、文久年間にオランダに派遣された西周と津田真道との意見の相違にはじまり、大日本帝国憲法のみならず、孫文や吉野作造の政体論、穂積陳重の民法に関する学説にも翳を落とし、倫理観における「東洋」観の系譜を形作る。「東洋」の優位を言い立てる言説は、両大戦期には野口米次郎、鈴木大拙、柳宗悦、和辻哲郎、橋本閑雪、鼓常良、保田與重郎などの著述家にあつて、多様に変奏された。しかし従来こうした問題意識は、日本内部で孤立して批判される傾向が支配的であつた。同時代中国の蔡元培、梁啓超、林語堂、周作人、あるいはインドのアナンダ・クーマラスワミー、カリダス・ナグーをはじめとした知識人の思索や行動と並列し比較することで初めて、「東洋」における「東洋」像の孕む問題と可能性を総合的に明らかにできよう。こうした観点は、敗戦後の極東軍事裁判における倫理問題、民法改正の思想的背景の再検討にも有効となるであろう。

◎研究協力者・佐々木健一、金田晋、朴美貞、陸偉榮、中島岳史、鈴木貞美、牛村圭

◎招聘予定者・孫歌、フェリックス・カプトウ、サザナ・フォルマレク

*第五班の成果は、本書第五部「美的東洋の探究と桎梏」に一部収録したほか、併催した国際研究会の英文報告書（注17）および研究分担者・研究協力者が別途に刊行する論文として社会還元を果たす。なお研究協力予定者のうち別途の科学研究費補助金の交付を受けた者については、経理上の無用な混乱を避ける配慮から、本研

究による助成ではなく、別途の補助金による研究成果として報告した成果があることを付言する。なお前後して国際日本文化研究センターでは、ここで言及された人物や事績に関わる共同研究が何本か実施された。そのため、この計画に揚げた幾つかの話題のうちには、それらの共同研究に吸収されたものがある。その成果報告はこれらの共同研究会報告書の刊行に待つ。²²⁾

Ⅵ 「東洋対西洋」の対比図式に孕まれたジェンダー的偏差の比較文化・方法論的検討

統括責任…中村和恵 《東洋対西洋》の図式は、しばしば西洋側支配者を《男性》に、東洋側の被支配者を《女性》とみる図式を誘発してきた。だがこの図式は「東洋」内部での支配と被支配という入れ子構造を隠蔽する隠れ蓑に悪用される場合もあった。また英国支配の植民地インドにおけるシスター・ニヴェイタからミラ・アルファアサにいたる系譜からもわかるように、欧米の白人女性がアジアの社会変革に関与していたという係数が見落とされてきた。岡倉覚三や野口米次郎の東洋観は「母なるインド」を見落としては理解不能であり、実際、「東洋」における女性の地位に関する議論は、「東洋学」の政治性と無縁でない。また辜鴻銘や周作人が日本婦人を、新渡戸稲造が米国婦人を娶った事実を含む社会学的意味なども、当時の国際的な知的環境のもとで、「東洋」をジェンダーの視点から解明するため糸口となる。片倉もとこ『イスラームの日常生活』、井波律子『中国烈女伝』の着眼を拡大し、これら先行研究の合間の時代に着目し「東洋」における《女性》の役割を解明したい。

- ◎研究協力者…濱下昌宏、金恵信、村井則子、堀まどか
- ◎招聘予定者…グーハ・タクルタ

*第六班の研究遂行は、統括責任予定者が在外研修に赴くこととなったため、班としては解消し、他の作業班に

溶け込ませて遂行した。なおここで言う「ジェンダー」は狭義のものではなく、いわゆる殖民地経営の半面を占める「影の仕事」shadow workという広大な研究領域をなす。その成果の一斑は、本書では第六部「経営事業としての「東洋」」に組み込んだ。なお別途刊行する海外国際学会英文成果報告書（注17第二部）にも、その成果の一部が公表されている。²³⁾

本書の限界

本書の目次に見える構成は、以上の計画から派生した、実際の発展形態、あるいは現実的な妥協の産物である。いうまでもなく、実際の研究会では参加者に異同がある。とりわけ勤務先の都合や在外研修などの事情でご参加いただけなかった国内研究者もあれば、招聘を希望しながら本務ほかの事情で来日を果たせなかった海外の研究者もある。さらに編集の都合および許される紙幅の関係で、本論文集では、I-VIの各部ごとに三本の論稿を収録したにとどまる。またこの計画表とは異なった範疇に入れ替えさせて頂いた論稿もある。くわえて、別途の国際研究集会（二〇一〇年、京都の国際日本文化研究センターにて開催…注16の文献）あるいは海外の国際学会（二〇一〇年はソウルの国際比較文学会…注17の文献）で発表された英文論文は、本論文集には収録されていないことをお断りする必要がある。

編集の時間的制約などの理由により、本論文集からは積み残しとなった共同研究員各位には、この場を借りて、研究代表者・編者として、あらためてお詫び申し上げたい。なお、共同研究会そのものの実施状況については、本論文集巻末に、四年間にわたるその日程と発表者・発表題名一覧を掲載した。最後に、本論文集には収録できなかった論考については、別途に公表の機会を設けるべく計画中であることを、付記しておきたい。²⁴⁾

- (1) 以下は、本研究遂行のために平成二二年度より三年計画として申請した科学研究費補助金「基盤研究(A)(一般)」『東洋』的価値観の許容限界・「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」の計画調書を、本報告書の主旨に照らして書き改めたものである。行政書類ゆえにやや煩雑かつ「居丈高」あるいは「自己顕示臭」の目立つ行文も残るが、昨今の競争資金獲得の書式に従ってそのまま掲載することとする。(二〇一二年二月一日記)
- (2) Edward W. Said, *Orientalism*, Vintage Book, 1978. エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳・板垣雄三・杉田英明監修、平凡社、一九八六年。藝術史の領域でのその最良の批判としてはJohn MacKenzie, *Orientalism, History, theory and the arts*, Manchester University Press, 1995. ジョン・M・マッケンジー『大英帝国のオリエンタリズム 歴史・理論・諸芸術』平田雅博訳、ミネルヴァ書房、二〇〇一年。
- (3) 科学研究費補助金申請書では、「研究目的」欄に「応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等」を記述すべし、との規定がある。以下の節はこの規定を満たすための記述である。
- (4) 『岩波イスラーム辞典』岩波書店、二〇〇一年、該当項目。「オリエンタリズム論」山内昌之・大塚和夫編『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社、一九九三年、二七六―二九一頁。これらの執筆を筆者に促したのは一九八二年にカイロで会った、故・大塚和夫であった。哀悼の意をこめてここに記録する。大塚和夫「稲賀繁美編『異文化理解の倫理にむけて』『文化人類学文献事典』弘文堂、二〇〇四年、二二頁。
- (5) その出発点としてShigemi Inaga, «Impossible Avant-garde au Japon», in Transcultura (ed), *Connissance et réciprocité*, CHICO éditeur, 1988 pp.197-207. “The Impossible Avant-Garde in Japan : Does the avant-garde exist in the Third World? ” *doxa*, 2010, Istanbul : Norgunk Publishing House, 2010, pp.82-89に英訳再掲。
- (6) Shigemi Inaga (ed.) *Crossing Cultural Borders, Beyond Reciprocal Anthropology*, IRCJS, (1999), 2001.
- (7) Shigemi Inaga, “Additional Recommendations for the Dialog between the Civilizations,” International Conference on the Dialogue of Civilizations, Tokyo, United Nations University, 31 July-3 August, 2001, University (accessible by web edition). 筆者がこの国際学会の組織委員に招いたのは、沙漠学会の創設者として知られる中東専門の地理学者、故・小

堀巖教授である。ここに哀悼とともに感謝の意を表明したい。

- (8) 中国語訳が「理解異質文化的可能性与極限性」として王賓(編)『獅在華夏…文化双向認識的策略問題』中山大學出版社、一九九三年、九九―一〇頁に掲載されている。
- (9) その発表論文は以下に掲載。Shigemi Inaga, Patricia Fister (eds.) *Traditional Japanese Arts and Crafts in the 21st Century*, IRCJS, (2005), 2007. 本論集は「国際日本文化研究センター第二七回国際研究集会報告書」である。
- (10) 稲賀繁美「異文化とどうつきあってゆくか」佐々木英昭(編)『異文化への視線』名古屋大学出版会、一九九六年、一―一八頁にその実相と、それに対する対応方法を取る違える日本の教育への批判を展開した。
- (11) 稲賀繁美(編)『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会、二〇〇一年。
- (12) 同様の考察をはるかに簡潔かつ具体的に、しかもより鋭く平易に展開したものととして、四方田犬彦「故郷と国家」『人、中年に到る』白水社、二〇一〇年、一五五頁。
- (13) その和文報告書は、稲賀繁美(編)『伝統工藝再考・京のうちと』思文閣出版、二〇〇七年。
- (14) Shigemi Inaga, "Is Art History Globalizable?" in James Elkins (ed.), *Is Art History Global*, Routledge, 2007, pp.249-278. Shigemi Inaga, "Translation" in James Elkins et al (eds.) *Art and globalization*, The Stone Art Theory Institutes, The Pennsylvania State University Press, Vol.1, 2010, pp.22-35.
- (15) Shigemi Inaga, *Climatology of Cultural Conflicts, Collected Papers in 2 vols.* Private edition, 2007 (not in circulation).
- (16) Shigemi Inaga (ed.), *Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of Asia under the Colonial Empires*, IRCJS, (2010), 2011.
- (17) Shigemi Inaga (ed.), *Artistic Vagabondage and New Utopian Projects: Transnational Poetic Experiences in East-Asian Modernity 1905-1960, Selected Papers from the XIXth Congress of the International Comparative Literature Association, 2011* (not in commercial diffusion).
- (18) 関連する国際学会で編者が招聘講演を要請されたものとして、インドの詩聖タゴールの生誕百五十周年を記念した国際学会『Asia after Tagore: The Legacy of Rabindranath Tagore, "Friend of the Kern Institute (VVIK), University of Leiden, Sep. 23-24, 2011. また以下の報告書にも関連する論文がいくつか収録されている。『Changing Perceptions of Japan

in South Asia in the New Asian Era, ed. by Uno Takao, International Symposium in India, IRCJS, 2009.

(19) なお関連する問題意識を扱った研究論集で編者が関わったものとして『*Overcoming Modernity and the Kyoto School, International Symposium* (organizer: Junichi Isomae), IRCJS, May 23-24, 2009』が、追って酒井直樹・磯前順一(編)『近代の超克』と京都学派：近代性・帝国・普遍性』日文叢書46、以文社、二〇一〇年として日本語でのみ出版されている。また『*Devenir l'autre: Expérience et récit du changement de culture entre le Japon et l'Occident*, textes réunis et présentés par Christine Maillard et Sakae Murakami-Giroux, Paris: Piquet, 2011』は国際日本文化研究センターにおいて

細川周平氏が中心となり、アルザス日本研究所と共催で企画した同題の国際研究会の報告書である。編者は本研究会の統括討議を依頼されたが、その報告原稿は、編集上の都合で上記編者には含まれておらず、別途刊行予定である。

(20) 第三分科会では、戦暁梅・藤原貞朗両氏の主催により「一九一〇―三〇年代の国際環境のなかの中国美術」ワークショップ、東京工業大学、二〇一二年七月十六日を開催し、久世夏奈子氏が美術研究誌『国華』にみえる中国美術の扱いを分析し、藤原貞朗氏が瀧精一の東洋美術研究を検討している。またジャポニスム学会では二〇一一年七月九日の例会で、南明日香氏がジョルジュ・ド・トレッサンの日本美術研究、藤原貞朗氏がアンリ・フォションとポスト・ジャポニスム美学をめぐる研究発表を行っている。また戦暁梅氏も寄稿している『民国期美術へのまなざし 辛亥革命百年の展望』勉誠出版、二〇一一年も参照されたい。いずれも日本の東洋学術とアジアさらには西欧世界との関係を問い直す先駆的な視点を含む。

(21) なお、佐野真由子氏は、当該研究会第四部会の延長として、以下の二つの研究会を実施している。「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る」国際日本文化研究センター、二〇一二年二月二五―二六日(所内・所長裁量経費による運営)。および、「万国博覧会とアジア——上海から上海へ、そしてその先へ」国際日本文化研究センター、二〇一一年九月三〇日―十月一日(国際日本文化センター・所内シンポジウム経費による運営)。

(22) 関連する企画として編者が関与したものには、『近代の東アジアイメージ―日本近代美術はどうアジアを描いてきたか』豊田市美術館、二〇〇九年(本書第二章、千葉慶論文参照)。ここで問題とされた近代における東アジア意識については、稲賀繁美「相互浸透する北米アジア研究の現状と、閉塞する日本研究人文学の凋落と―第七〇回北米アジア研究会ホノルル大会・傍聴記」『あいだ』(百八十二号より百八十五号、四回分載、二〇一一年)もご参照いただきたい。

さらに東西の価値観の相克とそのなかでの思索については、*Aesthetics and Cultures, First Polish-Japanese Meeting, Exchanging Experiences*, Jagellonian University, Krakaw, May 23-24, 2011. 日本比較文学会「パネルディスカッション(橋本順光氏・企画)」「欧州航路の比較文学」九州産業大学、二〇一一年六月十八日、発題は、橋本氏のほか、西原大輔、山中由里子各氏に本書編者。前者では矢代幸雄の事例が取り上げられ、後者では和辻哲郎『風土』の場合にひとつの焦点が探られた。いずれも関連報告論文は、本報告書とは別に刊行予定である。さらに二〇一一年は、柳宗悦を朝鮮陶磁器に開眼させた浅川伯教、浅川巧兄弟のうち、弟の生誕百二十年を記念して『時代の国境を越えた愛・浅川巧の林業と韓国民族工藝に関する研究』(ソウル国際親善協会・浅川学術会議)が二〇一一年九月五日、ソウルの韓国プレスセンターで開催された。本書の関係者としては、朴美貞氏が事務渉外に関与し、橋本順光氏と筆者が講演を行った。講演原稿は同報告書にハンゲル訳とともに収録されている。

- (23) 国際日本文化研究センターにおける共同研究の成果報告である本書とは別途に刊行された、関連する並列的企画として、編者が参与したものに限定して若干を以下に註記する。楽黛雲・孟孟華(主編)『多元之美 Esthétique du Divers』北京大学出版社、二〇〇九年(北京大学比較文学学術研究会報告書)。モノ学・感覚価値研究会・アート分科会編『物気色 Monokeiro』美学出版、二〇一〇年(和英二ヶ国語出版)。James Elkins, Zhivka Vallavicharska and Alice Kim (ed.), *Art and Globalization*, Pennsylvania State University Press, 2010.

- (24) なお編者は International Conference, *Forgotten Japonisme*, TrAMN Research Centre, University of the Arts London, Sackler Gallery, Victoria & Albert Museum, London にて招聘講演 “Questions of Oriental Aesthetics: anthesis to Design?” (July 9, 2010) またモスクワで開催された International Conference, *Orientalism/Occidentalism: Languages of Cultures vs. Languages of Description*, Russian Academy of State Service under the President of the Russian Federation, Moscow, Sep. 23-25, 2010 にて “Key-note lecture “Crossing Axes: Occidentalism and Orientalism in Modern Visual Representations of the Manchuguo (1931-1945)” を講演した。講演原稿は、現在個別に発刊準備中であるが、これらに不ずれも、編者が研究代表者を務める、科学研究費補助金(基盤研究(A))「東洋」的価値観の許容限界: 「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶」による研究成果の一環を、招聘をうけた国際学会の場を借りて海外発信したものである。